

---

**流星恋歌**

~ boy meet to meteoric girl ~

烏丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星恋歌      \ boy meet to meteoric  
girl \

### 【Nコード】

N6099G

### 【作者名】

烏丸

### 【あらすじ】

流れ星に彼女が欲しいと願ってみたら、流れ星自身がやって来た！？結構ベタなラブコメ短編です

夜空を眺めるのに理由なんか要らない。

窓を開ければ其処に広がる無数の星々。それだけでファンタステイックだとは思わないか？ …… ファンタステイックってどういう意味だっけ？

…… まあそれはともかく。オレ、石動いしずけ 秋馬あきまは今、自室の窓から身を乗り出し満天の星空を見上げている。別に天体だとか星座だとか、天文学的なものに興味を持っていないわけではない。さつきも言った通り、残念ながら理由なんて高尚な物は持ち合わせておらず、何となくボンヤリと星空を見上げているだけだ。きっかけも特に無い。強いて言えば其処に星空があったからか？

そしてここらは田舎と都会の狭間のような町なので、星空も田舎ほど綺麗には見えないが都会よりはずっとよく見える。

星座なんてものも名前しか知らないのも、どれがどれなんだかさっぱり分からないが、それでも星空には人を引き寄せる魔力があると思う。オレみたいな学も何もない人間が黙って見入ってしまうのが何よりの証拠だ。

そうして星空をジッと見上げていると、どういったわけか不思議な事に妙にセンチメンタルな気持ちになってくる。他人は違つかもしれないが、少なくともオレはそうだ。

別に死ぬ直前でもないのに、何故か今までの人生がフラッシュバックしたりする。そして昔の記憶を掘り起こしては更にセンチメンタルな気持ちになってしまう。

たかだか十数年の人生だけど、それなりに充実した人生だと思ふ。健康で病気も無く、事故にも遭った事は無い。家庭も平和で、学校生活も順調……。

…… 学校生活。

その単語が脳裏をよぎった瞬間、一つだけ心残りがあるという事

にふと気がつく。まあ、心残りと言つても、別にこれから死んだりするわけではないので少し語弊があるかな？

その唯一の心残り、それはズバリ『彼女がいない』という、少なくとも名譽的な事ではない事実だ。更に付け加えれば出来た事も無い。彼女いない歴〃年齢の嫌な方程式の真つ最中なのだ。別に特別欲しいと思つた事は無いのに、改めていないと思つと非常に空しい。なにも今までの人生の中で、恋の一つも無かつたわけではない。

その思いを伝えるに至るほど、燃えるような恋心でなかつただけだ。そんな事を考えながら星空を見上げていると、なぜだか目から液体が滴り落ちてくる。……これはあれだ、俗に言つ心汗つて奴だ。けつして涙なんかじゃない。泣いてなんかない。

オレが止め処なく溢れてくる心の汗を手で拭っていると、星空の中に一本の線がスーッと入るのが見えた。あれはきつと流れ星。英語にするとシューティングスターだ。

由来は知らないが、願いを込めて祈ればなんとやらで有名な流れ星。考えてみれば、実際にお目にかかる機会なんてものは極々僅かなんじゃないだろうか？ 願いが有る無いに係わらずお目にかかれてラッキーだ。

そんな貴重な物なのだから、願掛けしたら叶うという迷信が古来から信じられているのも頷けるような気がする。

そう思っていると、星空に再び流れ星が現れる。……いやちよつと待てよ？ あれは流れ星なのか？

……なぜオレが流れ星だと言い切れないのかというと、その流れ星の落下速度が異様に遅かつたからだ。普通なら一瞬で消えるようなものがなかなか消えないのは、それだけでおかしい事だと思う。となるとあれは飛行機？ それとも人工衛星？

……まあ、どっちでもいいか。元々流れ星だつて岩かスペースデブリのどつちかなんだから、それが飛行機でも人工衛星でも変わりはしないだろう。重要なのは祈る事と信じる事だ。

というわけでオレは合掌すると、星空をユツクリと移動する流れ

星？ をジツと見据えながら誠心誠意思いを込めて、祈りの言葉を口にする。

「オレにも美人の彼女ができますように……」

そこでオレの記憶は突然プツリと途絶えた。

翌朝。オレは全身に満遍なく感じる鈍痛と、オレの記憶には無い謎の感触によつて意識を取り戻す。

はて、オレは一体いつ自分のベットに入ったんだ？ 昨日は確か……。流れ星に願いを言つて……。うん、見事にそれから先の記憶が無い。

……ぐ、しかもなんでか体中が滅茶苦茶痛いぞ？ この痛みは去年自転車で電柱に激突した時の痛みによく似ている。

そしてオレは、体の痛みに集中していた事で意識の外になっていた、もう一つの違和感に気がつく。

何だこりゃ？ 右腕に何か柔らかい物がまとわりついてるような……。

オレは痛みで体を起こすのが億劫なので、首だけを右腕の方に向ける。そしてオレはとてつもない衝撃を受けた。

布団が被さっているので詳細はまだ不明だが、右腕のあたりに異常な膨らみが出来ていたのだ。

「なんじゃこりゃああああああっ!?!」

昨日まではありえなかった変化に、オレは思わず絶叫してしまう。

布団の上から確認できる膨らみは、軽くオレの足元まであり、その大きさがハッキリと分かる。

何だコレは!! オレの右腕がでかくなったのか!? 寝てる間に改造でもされたのか!?

「弁護士を呼べえええええっ!!」

いきなりの体の変化に、自分でも意味の分からない事を絶叫してしまう。そして、その叫び声に反応したかのようにオレの右腕がもぞもぞと動く。

こ、これはオレの無意識でも動くのか!! おのれ、どこの組織か知らないがなんとという事を……!!

「……朝早くから何叫んでるの?」

わぎゃああああああっ!! しかも喋ったああああああっ!

? 何!? この右手!? 新車の寄生獣!?

そうしてオレの頭の中がパニック症状を起こしていると、バサリと布団の一部がめくれ上がる。

「……へ?」

布団の中を見たオレは二重の意味で言葉を失った。一つ、右手は改造なんかされていなかった事。まあ、コレに関しては大した問題ではないだろう、実際に改造されてなかったわけだし。

問題は二つ目だ。

布団の中にいた先程の声の主。俺の右腕にギュツとしがみ付いている物体X。細かく説明すると、耳が隠れる程度に切りそろえられた藍色の髪の毛。ルビーのような紅い瞳。向こう側が透けて見えてしまうのではないかと思うくらい白く綺麗な肌。そして、やや幼いが可愛く整った顔立ちに、その顔に合ったやや小柄の体躯の少女がそこにはいた。

大雑把に言ってしまったえば、滅茶苦茶可愛い女の子がオレに布団の中で、オレの右腕に抱きついていていた。

え？ これ何てエロゲ？

「……えーっと、どちら様？」

オレは少々混乱気味の頭で、とりあえず目の前にいる少女にコンタクトを試みる。

少女は少しだけ眠たそうに目を擦ると、オレの顔を見つめながら口を開く。

「……貴方の妻」

目の前の少女は無表情で淡々と、だがハッキリとそう言った。

「つま？」

爪つま。つめの古形。他の語に冠して複合語にのみ用いる。

「……字が違う」

「なぜ考えてる事が分かった!？」

仕方ないじゃないか、オレだって違うってわかってるさ。でも妻っていえばもうあの妻しか残っていないわけ……。

「……言い方を変えればワイフ」

やっぱりそっちの方の妻なのか!? ていうか、なんで見ず知らずの女の子がオレの部屋にいて、しかもオレの妻なんて言ってるんだ!?

オレの頭の思考回路は負荷のかかりすぎでオーバーヒート寸前だ。なんだこの状況は!?

「説明を求めろ!！」

とりあえず、現状を打開すべくオレは未だにオレの腕に張り付いている少女に尋問をすう事にした。

「……わかった」

少女は何の反論をするでもなく、短く承諾の言葉を返すとムクリと体を起こす。

「って!?! なんで服を着ていない!?!」

オレの目に飛び込んできたのは、起伏の少ない平坦な少女の裸体

じゃなくって！！ ナレーションなんかいれてる場合じゃねえ！！

「……夫婦だもの」

そんな相田みつをみたいに言われても困る。

「早くなんか着てくれ！！ 頼むから！！」

こんなところ家族に見られたら、何言われるか分かったもんじゃない！！

「……ちえー」

少女は裸を見られたというのに、顔色一つ変えずに立ち上がる。するとその体が一瞬にして黒いボディースーツのような物に包まれる。オレがその光景に言葉を奪われていると、少女は再びオレの入っている布団にモゾモゾと潜り込んでくる。

「だから！！ 説明しろっての！！」

「とりあえず、お前は一体誰だ？」

何とか布団から少女を追い出したオレはベットに腰を掛け、正面に立っている少女に質問を開始した。

「……あなたのこと」

「だからそうじゃなくて！！ 名前とか、なんでここにいるのかだとか！！」

俺の言葉を聞いて少女は少し考えると、再び口を開く。

「……この星の言葉を借りると……… 私は宇宙人である、名前は  
ない」

は？ ウチュウジン？ そんな人種あったっけか？ ていうか何故夏目漱石？

「……現実逃避はのーさんきゅー。現実を見るべき」

少女の淡々かつ気の抜けるような言葉がオレの現実逃避の行く手を阻む。ていうか、なんで考えている事が分かる!?

「……旦那のハンドルは私が握っている」

少女は無表情のまま力強く拳を握り締める。いや、答えになつてないから。

「ハンドル云々は置いて……。お前が宇宙人だつて言われても、ほいほい信じられるわけが……」

「……じゃあ宇宙人じゃなくていい。……大切なのは其処ではないから」

少女はアツサリと宇宙人発言を撤回する。いいのかそれで?

「あー、じゃあ何で突然オレの所に? それにオレの妻つてなんだ?」

そう、思えば少女の言った通り。重要なのはこの子が宇宙人か否かではない。なぜこの子がオレの部屋にいたのかということとこだ。

オレの言葉に、少女は少しだけ気恥ずかしそうにモジモジすると上目使いでこちらを見つめてくる。……無表情のままだけだね。

「……昨日の夜、宇宙を飛んでいたら貴方に告られた」「は?」

少女の言葉に、オレの頭は?マークで一杯だった。オレがこの子に告白した!? 何時? どこで? どんな風に? ……ていうか飛んでいた!?

「……昨晚の地球時間午後9時46分22秒。貴方はこの部屋、私は熱圏約449キロ地点に。あなたは私を見つめながら『オレの嫁になれ!!』と声高らかに……」

「ちよつと待てえいつ!!」

少しずつだが状況が掴めて来た。この子の言った時間帯、確かにオレはこの部屋で星空を見上げていた。百歩譲つてこの子が宇宙人で空高く飛んでいた事も信じよう。だが!!

「オレはそんな事言つてねええええつ!!」

誰が天体目掛けて「オレの嫁になれ!!」なんて叫ぶか!!

「……正確には『オレにも美人の彼女が出来ますように』と言っていた」

「違いすぎるだろうが!!」

表情一つ変えずに、何事実を捻じ曲げてるんだコイツは!?

「ん? ていう事は昨日の妙な流れ星はもしかして……」

「……そう私。ちよつと大気圏を突破していたら、貴方からのラブコールを受けた」

少女は少しだけ頬を紅くする。

いやいやいや、ちよつと大気圏突破するってなんだよ!? 一体

何してんだよお前は!!

「……そしてそのまま、貴方目掛けて抱きついた」

……抱きついた?

「ひよつとして昨日の夜、いきなり俺の意識がなくなったのは……」

「……そのせいで意識がなくなったかどうかは分からないけど、抱きついたら気絶してたからそのままベットに連れていった」

体中痛いのは全部コイツのせいか!! 大気圏から体当たりされ

たら誰だつて気絶……ていうか普通に死ぬだろ!! よく生きてた

なオレ!! グッジョブオレ!!

「……ぶつちやけ、ちよつと死に掛けてた」

「なんですとおおおおつ!?!」

グッジョブじゃなかったぞオレ!? やっぱ死に掛けてたんじ

やねえか!!

「……大丈夫、頑張つて直したから」

……漢字が違いますよ? 直すじゃなくて治すでしょう?

部屋の隅にノコギリとか金槌があるのはきつと気のせいだ。きつとオレが日曜大工をする為に持ってきていたに違いない、記憶には無いけど。

今だけは、こいつの宇宙人的な何かを信じる事にしよう。

……そういえば、さっきからオレはこの少女の事を、こいつとか

お前とか呼んでるが、さっきこの子名前は無いとか言ってなかったか？

「そつえばお前、名前は？」

「……ない」

少女はためらうことなく一言だけそう言った。

「無いって、じゃあお前なんて呼ばれてたんだ？」

「……ない」

「だから何て……」

そこでオレはフト気がついた。……もしかして。

「お前、ナイって名前なのか？」

「……さっきからそう言っている」

くそう、なんてベタベタな……。

「……お約束は笑いの基本。気にする事はない」

何が基本だ。別に笑いを取りに行つたわけじゃない。

「……貴方の名前は？」

おっと、そつえば自己紹介も何もしてなかったっけ。現状の把握に必死で忘れていた。

「おれは秋馬。石動 秋馬だ」

「……分かった、あなた」

「……秋馬だつて」

「……あなた」

「秋馬」

「……あなた」

「しゅ」

「……あなた」

「……もうなんでもいいや」

なんか、数十分位しか話してないのに、とてつもなく疲れた。：

…そつえば今何時だ？

壁に掛けられている時計に目をやると、現在朝の5時半。まだ少し寝られるな。

「とりあえず、夫婦云々の話は後だ。オレはもう少し寝る」  
問題の解決にはなっていないが先延ばしにはできる。

「……わかった」

ナイは短くそう言うと、三度オレの布団に潜り込もうとしてくる。  
……もうどうでもいいや。

オレは、疲労感から来た睡魔も手伝って、特に追い出すでもなく  
ナイの侵入を放置する事にした。

一体これからどうなるんだろう。再び眠りの世界に旅立とうとする  
オレは、少しだけ未来の事を心配してから、現実の世界から旅立  
つていった。

誰かがオレを呼んでいる。オレを呼ぶ声は遠くから微かに、だが  
確実にオレの耳へと聞こえて来る。誰だ一体？ 何の用なんだ？

その声は段々とハッキリと聞こえてくるようになり、しだいにそ  
の言葉の内容も分かるようになってくる。

「……ちゃん……朝……きて」

ん？この声には聞き覚えがあるな？ 随分と聞きなれたような声  
の気がするな。

「お兄……ん……はやく……と……ちやうよ？」

誰の声だったか……喉のトコまで出てきてるんだけどそれ以上が  
なかなか出てこない。しかもなんだろう、この声が聞こえてくると  
いう時点でオレはなにか大変なミスを犯してしまっているような……  
…。

「お兄ちゃん！！ いい加減起きないと遅刻しちゃうよ！！」

ハッキリと聞こえてきたその声でオレの脳は完全覚醒し、夢の淵

から現実へと飛び起きる。この声は春花<sup>はるか</sup>か！？

オレが脊髄反射の如く声に反応し目を開くと、寝ている俺の横にポニーテールの少女が立っていた。いや、少女なんて回りくどい言い方をせずともコレが誰なのか何て一目で分かる。

石動 春花。我が家の長女にして俺の一つ下の妹。これ以上の説明が必要だろうか？

「あ、やっと起きた！ もう早く起きないとご飯食べる暇なくなっちゃうよー!!」

オレが起きたのを確認した春花は、元気のいい笑顔をオレに向けてくる。こいつ、何時もはオレよりも遅く起きて来るくせに、何で今日に限って早起きでしかもオレを起こしに来る！？

オレの横には、ある意味今のオレにとっては核兵器より危険の物が文字通り眠っているっていうのに!!

「ところでお兄ちゃん。その布団のふくらみは何？」

ほら来た!! やつぱり来た!! ていうか来ないほうがおかしいからね!? オレが春花の立場なら間違いない聞くもの!!

春花がオレの横で眠っているナイの膨らみを指差しながら、不思議そうに俺の顔を見る。春花は知る由も無い、兄の横では宇宙人の女の子が眠りについていてという事を。何を隠そう、オレもちょっと前まで知らなかったんだからな。

とりあえず、なんとか誤魔化さないと今後の生活どころか、今後の人生に支障が出てきてしまう。大丈夫、春花は単純だからきつと誤魔化せる!! 誤魔化されて欲しい!! 誤魔化される!!

俺は脳内で誤魔化される三段活用を唱えながら、春花のこれ以上の進行を阻止すべく最大限の言い訳を考え出す。

「春花……この膨らみにはな、人類の夢と希望が詰まっているんだよ」

「はいはい、いいから早く起きてよ!!」

この野郎、人が考えた精一杯の言い訳を簡単にスルーしやがった。しかも、布団を剥がそうと手を掛けてきた。こりゃいいいよヤバ

いけないか？

「ちよつ！？ 自分で起きるから剥がそうとするなつて！！」

布団を剥がされまいと必死に抵抗するオレ。ここが最後の砦だ。ココを突破されれば全てが終わる。具体的にはオレの人生とか。

「そう言つてお兄ちゃんつたらいつも起きてこないんだから」

楽しそうに笑いながら布団を引つ張る春花。言つておくが、コイツを朝起こしに行つて起きてこなかったことは多々あるが、こいつに朝起こされた事なんか今までの人生で片手の指で足りる程度しかない。勝手に記憶を捏造しないで欲しい。

オレが春花の発言に憤つているムツとしてる間に、当の春花はいよいよ本気で布団を剥がしにかかつてきた。

「お兄ちゃん！！ 遊んでないで早く起きてよ！！」  
「起きたから早く部屋から出てくれ！！」

しかしオレがいくら反論しても、春花の強行姿勢に変化はない。むしろ、オレが抵抗すればするほどその手にこめられる力が強くなつてる気がする。

「お前……スルーしたフリして俺の夢と希望が詰まったパンドラの箱を開ける気だな！！」

気づくのが遅かった。春花の視線はオレの横の膨らみに集中しており、その顔には正体を暴こうというのがありありと浮かんでいる。「ばれちゃつたらしかたがない！！ 大丈夫！！ 変な抱き枕が入つてもお兄ちゃんのこと嫌いになつたりなんかしないから！！」  
「変な抱き枕つてなんだ！！ オレはそんなもの持つてない！！」  
それより大変なのが寝てるだなんて口が裂けても言えない。オレは本性を現し、興味津々といった風に布団を剥がしにかかる春花に必死に抵抗をする。

しかし体勢的に、オレが抵抗しても春花に抗うには無理があり、徐々に布団が剥がされていく。

「お兄ちゃん覚悟しなさい！！」

そして春花は気合一閃、布団を勢い良く剥ぎ取る。

一瞬オレはすべてが終わったような喪失感に襲われた。が、それはオレの予想と反して杞憂に終ることとなった。

「……え？」

「なんだ、ただ毛布丸めて抱いてただけじゃん。変な絵も描いてないし」

春花はつまらなそうにオレの脇にある丸まった布団を見る。

その一方で、オレのほうはあっけにとられ顔をポカンとさせていた。それもそうだ、オレは今の今までそこにはナイの奴が眠ってるものだと思ってたわけなのだから。……まあ、いなくて助かったわけだが。

もとよりそのことを知らない春花は、抱き枕が無かったことを只々つまらなそうにしている。俺が本当に隠したかったものを知ったからそれどころではなかっただろうが、春花の奴がその事を知る由はない。

オレはナイが春花に見つからなかった事にほっとして、顔を春花の方に向ける。

「!？」

春花の方に顔を向けたオレに再び緊張が走る。オレの視線は春花の方、正確には春花の後ろにある押入れに釘付けになっていた。

押入れは数センチだけ開かれていて、その中から何故かナイの奴がこっそりとこちらの様子を覗いていたからだ。しかも口元に何か細い筒状のものをこちらに向けて咥えている。オレには吹き矢のように見えるんだけど気のせいだろうか？

「……ふっ！」

「あっ!？」

……気のせいじゃなかった。ナイが無表情で吹き矢をプツ！と吹くと、春花の首筋に刺さってそのままバタリとベットの上に倒れる。

「おおおい!! 何、人の妹を狙撃してるんだ!!」

オレは慌てて春花の安否を確認する。どうやら、気絶して目を回

しているだけのようだ。

「……チ」

「何舌打ちしてんだよ!？」

どうやら、結構本気で始末する気だったっぽいナイは、軽く舌打ちをすると押入れの戸をそのまま閉めてしまう。

「って、閉めるな!! ていうか吹き矢なんかどこから……」

オレはそう言いながらベットから立ち上がり、押入れの戸を開くが、押入れの中にナイの姿はなく、微かに人がいたような痕跡だけが残っているだけだった。

「あれ? ナイ?」

オレが呼んでもナイは姿を現さない。どうやら、この部屋にはもういないようだ。

その時オレは何だか狐に抓まれたような気持ちになった。もしかしたら、今までの行動はオレを脅かすためのドッキリのようなものだったのかもしれない。それが、寝ぼけたオレが夢と現実をこっぴどやにしたものか。そう思ったほうが、よっぽどリアリティがあるように感じられた。

どのみち、この部屋にナイという名の少女はもういない。いや、最初からいなかったのかもしれない。

オレは、胸になんだかモヤモヤとしたものを抱えながら、朝飯を食うため下に下りていくことにした。……その後で、ほったらかしにされた春花にこっぴどく叱られたのはいうまでもない。

朝。

春花の奴がへそを曲げて先に行ってしまった事を除けば、いつも通りの登校風景。春めいた日差しが降り注ぐうらかな天気は、それだけで学校に行くという気を削いでくれる。

何よりも、オレのなかで起こった昨晩から今朝までの出来事が頭にあり、いまいちシャキツとしない。なんだか不完全燃焼のような感じた。

「……………どうしたの？ あなた」

オレの横から、ナイが俺の顔を心配そうに覗き込んでくる（無表情だが）。

「いや、別に何でも無い。ちょっと疲れてるだけだ」

オレは、心配してくれるナイの頭を軽く撫でる。ナイのほうは少しだけ驚いたような顔をしたが、抵抗することもなくその身を預けてくる。

「ナイの髪の毛はさらさらしてるな……………つてオイ！！」

そこで、オレは我に返った。

普通に横を歩いていて気がつかなかったが、ナイがいつの間にか隣で一緒に歩いていたのだ。ていうか、気づこうよオレ。

「お前いつの間にオレの横に！？」

今更ながらに驚きの声を上げるオレ。そんなオレに対して、特にリアクションもなくナイはポツポツと口を開く。

「……………義妹いもこには悪いことをした。……………ついあなたの寝起きを襲う不届き者かと、つい近くにあつた吹き矢を」

「うちの押入れに吹き矢なんて無いはずだけどな」

オレにツッコまれたナイは、少しだけ視線をずらしてかまわず続ける。

「……………その後、あなたの口から撃つたのが義妹と聞いて、とりあえず逃げた。……………流石に将来家族になる人間との第一印象は良くした  
い」

宇宙人にも一応そういう考えはあるらしいな。まあ、すでにこいつの中でオレとの結婚が決定事項になっているのはどうかと思うが。

「あのなあ。さつきから結婚結婚言ってるが、オレはたった数時間前に知り合った奴とホイホイ結婚するような人間じゃないぞ」

世の中にはそういう人間もいるらしいが、少なくともオレはそんな人間ではない。

「いいか？ 結婚って言うのは、友人・恋人を経て初めてそういう関係になるもんだ。いくらお前が可愛くても、何も知らない奴となんか結婚はしない。大体お前がオレに結婚をせまる理由もハッキリしない」

オレは思っていた事を全てナイにぶつけた。改めて思うと、ナイの行動は無茶苦茶の一言だ。初めて見た人間にいきなり、自分はおなたの妻だなんて言ったりするか？ 少なくともその間に恋人というワンクッションがあってもいいような気もする

「……好きになったら、すぐ結婚するんじゃないの？」

ナイは今までの無表情とは打って変わり、明らかに驚いた表情でオレに聞き返す。

「いや、間違いじゃない。間違いじゃないんだが……」

その過程を数段すっ飛ばしているぞ。

「……知らなかった」

ナイにとつては驚愕の事実だったのだろう。いつもは表情の少ない顔からも驚きの色がわかる。

「……でも、私がおなたを好きなことに変わりは無い。……どうすればいい？」

そう言っただけの困ったような表情を浮かべるナイに、不覚にもドキリとしてしまう。

「だ、だから何でオレなんか好きになったんだよ！？ 宇宙人ってそういうものなのか！？」

好きだといわれて嫌がる奴は少ない。しかし、それでも疑問を抱かざるを得ない。それが会って間も無くしかも宇宙人なら尚更だ。

「……他の人が同じかはわからない。……でも私の場合」

ナイはオレの顔をじっと見つめる。

「……俗に言う一目惚れ」

「ひ、一目惚れ!?!」

ナイがオレを好きな理由。それは極めて単純明快な理由からきていた。

一目惚れ。

少女漫画か何かでは非常に頻繁に見られるシチュエーションだが、現実となると非常に稀なシチュエーションだと思う。しかも、その相手が宇宙人となれば、漫画でも見られない程の極めて稀なシチュエーションだ。

「……あの夜、ちょっと大気圏に突入していた私に、あなたが声をかけてきた」

まあ、距離的には約450kmくらい離れてただけだね。さすが宇宙人ということにしておこう、とりあえず。

「……声のするほうを見ると、あなたが私のことを真っ直ぐに見つめているのが見えた。……その時、私の中で今までに経験したことのないくらいの心拍数の上昇と、気持ちの高揚が確認できた」

「それで、そのまま大気圏からオレの部屋に飛び込んで来たわけか」  
この少女は無表情の見た目に反して、随分と情熱的で直情的な気性を持っているようだ。

ここまで思われていると知ると、こちらもナイに対して少なからず良い感情を抱き始める。もっとこの子を知りたいという感情が湧き上がってくるのを感じる。

「あー、ゴホン。ま、まあ何だ。結婚云々は置いて、もう少しお互いのことを知ることから始めないか？ オレもお前も、まだ互いの名前しか知らないだろう？ オレはまだナイの事を好きなのかよくわからないけど、もっとナイの事を知ることができれば、きつと……」

好きになることができる。そう言おうとしたその時だった。

オレの背後からももの凄い爆裂音と共に、吹き飛ばされそうな程の衝撃がオレ達に襲い掛かった。

「なんだよ!? 人がせつかくい事言おうとしているのに!!」  
台詞を中断させられたオレは、その元凶を確かめるべく後ろを振り向く。そして、オレは衝撃の元凶を目にし、驚きで固まってしま

う。  
オレの後ろに広がっていた光景。アスファルトはひびだらけに捲れあがっていて、まるでクレーターのようになっていた。そして何よりも異彩を放っていたのはそのクレーターの中心で仁王立ちしている一人の男。

筋骨隆々とした体格に2m以上はありそうな巨体、大きな口ひげに不自然な形で固まっているオールバック。そして飛ぶ鳥がシヨック死しそうなくらい鋭い眼光。しかも服装は紳士服にマントという怪しさ爆発の男だ。

しかし、昨日から起きているありえない出来事と現状を合わせて考えると、この目の前にいる人物がナイの関係者というのは用意に想像がつく。

男はクレーターから出てくると、腕を組み仁王立ちで高らかに叫ぶ。

「ナイアラトテップのプアアアパなのだあああつ!!」

風が身を切るといふ表現があるが、あれは決して誇張表現ではないのだということも現在身をもって思い知っている。

今オレがどんな状況にあるのかというのを簡潔に説明すると、ナイの小脇に抱えられながらも凄い速度で疾走しているのだ。その

速度は人間の出せる速度をはるか昔に突破しており、喋るのができないのはもちろんの事、油断したら口から表皮が全部持つていかれそうな勢いだ。

そして後ろ向きで抱えられているので、オレたちが疾走する羽目になった元凶の事がよく見える。

「うちの娘に手を出すなああああつ!!」

もの凄い形相で後ろから俺たちを追いかけてくるナイのパパ。

ちなみにさつき知ったのだが、ナイというのは愛称らしく、本名はナイアラトテップとかいう舌の噛みそうな名前のようなのだ。

そして、オレ達を追いかけてくるナイのパパさんは、先ほどの台詞からもわかるように、かなりの親バカのようなのだ。ナイが恋愛ごとに関する知識が薄いのも、この父親が原因のようだ。あまりの過保護ぶりで娘の結婚など考えたくないらしく、そういった知識とは無縁の教育をしていたらしい。

今も心配のあまり、一人で外出した娘を追いかけてここまで来たようだ。

「……愛を知った私に敵は無い」

しかし、ナイはどこかの漫画に出てきそうな台詞を言っや否や、オレを小脇に抱え逃走を開始したのだった。

当然のごとく、ナイのパパは烈火のごとく怒りだし、オレを始末すべく鬼のような形相で追いかけてきて、現在に至る。

「小僧おおおつ!! うちの娘に何をしたあああつ!!」

道行く人々を跳ね飛ばしながら猛進してくるナイのパパ。これがコメディじゃなかったら恐怖の大量虐殺劇だが、いかんせんコメディなので、道行く人々はギャグのように吹っ飛んでいくだけだった。……そんなんでいいのか？

「逃がすかあああつ!!」

そんな跳ね飛ばしている人間のことは気にも留めず、ナイのパパは更にその速度を上げる。

「……流石にちよつとキツイかも」

ナイの身体能力ももの凄いが、その父親はさらに凄かった。オレ達の距離は徐々に縮まりつつあり、捕まるのも時間の問題だろう。

「……こうなったら最終手段」

ナイはそう呟くと、どこからともなく丸い手のひら大のボールのようなものを取り出すと、背後を走る父親に向かって放り投げた。

「ナ、ナイ!? それはもしかして!？」

そのボールを見た父親は驚きの表情を浮かべると、ブレーキをかけようとする。だがいくら止まろうとしても慣性の法則でそう簡単に止まることはない。

そして、ナイのパパとボールが触れた瞬間、もの凄い爆音と衝撃、そして熱量が発生し、オレ達も吹き飛ぶように更に加速してその場を離れていった。

逃げ回ってどれくらいの時間がたっただろうか。オレたちは身を隠すように、どこかの路地裏に逃げ込んできた。走っていたナイ本人は涼しい顔をしてるが、抱えられていたオレはいろんな意味でぐったりとしている。もう生身である速度を経験するのは勘弁してもらいたい。

「ナイ、さつき親御さんにぶつけたのは？」

息も絶え絶えにオレはナイに質問する。

「……爆弾」

非常にシンプルでわかりやすい解答が返ってきた。まあ、あれは爆弾以外の何者でもないし、それのおかげで助かったのだから、それ以上のことは何も聞くまい。

「それにしても、あの親父さんは凄いな。……いろんな意味で」

オレの言葉にナイは申し訳なさそうな顔をする。

「……いつまでたつても子離れしてくれなくて」

それほどまでに親バカな人が、そう簡単に諦めるわけがない。このままじゃ永遠に逃げ回る羽目になるかもな……。

「……大丈夫、すでに手は打ってある。……あとはここから動かな

ければいい」

オレの考えてることを読み取ったかのように、ナイは返事をする。手を打ってあるって、いったい何をしたっていうんだ？ さっきまで一緒に逃げていたが、何か特別なことをした様子はない。

「……ちよつと連絡をした」

またまた、オレの考えを読み取ったナイは、俺の疑問に答えてくれる。だから、何故オレの考えてる事が分かる！？

「……愛ゆえに」

……もう、なんでもいいや。

そんなことを考えていると、遠くからナイの名を呼ぶ声が聞こえてくる。この声は聞き間違えるわけがない。さっきまでオレ達を追いかけていた張本人の声なのだから。

オレは緊張して身構えるが、ナイは気にしなくても大丈夫という風に落ち着き払ってオレの頭を撫でてくる。そんなに安心していられるのは、さっき言っていたやつのおかげなのか？

ナイのやつが一体何をしたのかは分からないが、ここはナイを信じてみるしかない。

「ナイイイイイツ！！ どこに行ったんだあああい！？ 小僧死ねええええつっ！！」

そうこうしていると、すぐ近くまで声が迫ってきた。ナイを呼ぶ声は心配そうな父親の声だが、オレを呼ぶときは殺気100%だ。

正直、オレが捕まったりなんかしたら、人としての原型を留めていられる自信がない。

そんな不安を抱きながらも、ナイの言葉を信じてジツとしていると、これまた近くで、何かが落ちてくるような空気を切る音と共に、もの凄い爆音が周囲に轟いた。この音を聞くのは本日二回目なので、何が起こったのか容易に想像がつく。

ズバリまた誰かが空から落ちてきたのだろう。しかも、どうやらナイのパパの近くに落ちてきたらしく、なにやら会話するような声が聞こえてくる。

「な、な、な、何故お前がこんなところに!? え? いや、これには深いわけがhけ; p b n z d f、: ぼ r! ?」

途中で声が聞き取れないようなものになったかと思ったら、何かを鈍器で潰すような鈍い音が数回聞こえたかと思うと、やがて音は止み静かになる。

「な、何が起きたんだ? さっきの声、お前の親御さんの声だよな?」

オレは動揺を隠せずに、隣のナイに訪ねる。ナイはその言葉を聞くや否や、オレの袖を引っ張り音のしたほうへ歩き出す。オレも何が起こったのか知りたいので、黙って引かれるがまま、ナイについていく。

そして、現場についたオレはあっけに取られた。そこには、一人の和服を着た女性と、顔面ボコボコになってグッタリしているナイのパパがいた。女性はオレ達の顔を見ると、笑顔でこちらに駆け寄ってくる。その拳に血がべつとりと付いているのは気にしないことにしよう。

「どうも初めまして、貴方がナイちゃんの彼氏さんですか」

オレの顔を見るや、嬉しそうにそんなことを言い放つ女性。もしかなくとも、この人がナイの連絡を入れた人物のようだ。

「ああ、申し送れましたが、私ナイちゃんの母親でございます」

ナイの母親を名乗った女性は、深々と頭を下げたお辞儀をする。服装といい物腰といい、どう見ても地球人にしか見えない。

「あ、あの貴方も宇宙の方なんですか?」

「はい。この格好は趣味です」  
趣味で地球の格好をする宇宙人ねえ……。

「それはそうと、このたびはうちの亭主がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

そういうと、再び深く頭を下げるナイの母親。

「い、いえいえ、娘さんを大事に思っているのなら仕方がないことです!」

頭を下げられ、慌ててフオローを入れようとすするオレ。しかし顔を上げたナイの母親は静かに首を横に振る。

「亭主のそれは少々度が過ぎるのです。そのおかげで、ナイは家族以外の人と接する機会が無く、また恋愛に関する知識も与えられませんでした。私は将来この子が本当に幸せになれるのかどうか、不安で不安で仕方ありませんでした。ですから先程この子から『…好きな人ができた。パパを何とかして』と連絡を受けたときは、嬉しさのあまり電話機をへし折ってしまいました」

ナイの母親は目じりに涙を浮かべながら、本当に嬉しそうに微笑む。

「もうこんな事が起きないように、亭主はしばらくの間牢屋に放り込んでおきますので、安心してください」

優しそうに見えて、この人も結構凄いこと言うなあ……。

オレがそんな事を考えていると、ナイの母親はボロ雑巾のようになったナイのパパをヒョイと担ぎ上げる。

「それでは娘のことよろしくお願いしますね」

ナイの母親は軽くウインクをすると、もの凄い速度で空に飛び上がると、あつという間に見えなくなってしまった。見た目は普通なのに、やっぱり普通じゃないんだなあ、としみじみ思ってしまった。

「……これで邪魔者はいなくなつた」

空を見上げていたナイがそう呟く。邪魔者とはいわずと知れた父親のことだろう。

「……あとは式を挙げるだけ」

オレの顔を見つめて少しだけ不敵な笑みを浮かべるナイ。

「だから、そういうのはもうちょっとお互いを知ってからだなあ…

…」

オレは相変わらず順序を間違えているナイに呆れ顔になる。

「まあ、いいや。これからオレが教えていってやればいいか……」

オレは半ば決定しているといつてもいい自分の未来に、心の中で苦笑しつつも案外あっさりとそれを受け入れた。

「……死ぬまで分からないかもしれないけど、それでもいい？」

そう言ったナイの瞳の中にある僅かな不安の色。オレはそれを拭いてやるかのように、言葉を紡ぐ。

「ああ、分かるまでずっと一緒にいてやるよ」

オレのその言葉を聞いたナイの、初めての満面の笑みに、オレは自分の未来を確信せざるをえなかった。

おそらく、教えられることがなくなったとしても、オレはこの少女から離れらる事はないだろう。

そして、恋を知った流れ星は、いつまでも消える事無くオレの隣で今日も光り輝くのだった。

f i n ……

(後書き)

どうも、烏丸という生き物です。

この小説は龍急さんという作者さんと二人一組で書かせていただいた、企画小説です。

担当は、原作が龍急さんで私は執筆のほうをさせていただきました。

少しでもご覧になった方々がお楽しみいただけたら幸いに思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6099g/>

---

流星恋歌 ~ boy meet to meteoric girl ~

2011年10月11日03時16分発行